

聖書に登場する人物で最も悲劇的な人物は『ヨブ記』の主人公ヨブだと言って間違いありません。彼は裕福で、可愛い子供にも恵まれ、仕合わせを絵に描いたような境遇に生きていました。しかしある日突然彼を災害が襲い、家屋は崩壊し、最愛の子供達も死んでしまいます。

そのヨブに今度は肉体的苦痛が襲いかかります。頭のとっぺんから足の先までできたできもののために、彼は四六時中身体をかきむしらなければならなくなるのです。その彼を見て彼の妻は冷酷にも言い放ちます。「神を呪って死になさい。」

ヨブにとって最も理解しがたいのは、彼の苦しみが不条理以外の何ものでもないという事実です。その苦しみの中で彼は神に向かって悲痛な叫び声を上げます。「私は全能の神に問うてみたい。神に対して私の立場を論じてみたい。」

この絶望の淵にあえぐヨブの前に3人の友人が登場します。3人は神の思いを見極めたと自認する神学者です。一人は、ヨブの苦しみは彼が過去におかした罪に対する神の裁きだと主張します。もう一人は、ヨブの子供達が冒した罪の罰を、神は父親であるヨブに負わしておられるのだと主張します。3人目の友人は、この不条理にしか見えない苦しみは、ヨブがより道徳的で信仰深い人間になるための訓練なのだと言います。

それぞれの主張は当時の人々の考えを簡潔に述べたものであり、それぞれ何らかの説得力を持つものでした。しかしヨブにとってこれらの神学的主張は何の慰めにもなりません。

何故なら、神学も思想も、人間の知恵をひけらかす道具と化す時、それは人を苦しめる残酷な道具となり得るからです。ヨブはいらだち、叫びます。「あなたがたの言葉は風に飛び散る灰と同じだ。土で造った、くずれ落ちた砦の塔だ。」

神は私を心にかけて下さっているのだろうか。私のような者などどうなってもいいと思っておられるのではないか。「何故神は空の彼方に隠れておられるのか。何故神は私を敵と見なされるのか。」ヨブの問いは留まるどころを知らず。「神よ、答えよ。私に答えよ。」

すると竜巻の中から神の声がヨブに向かって響き渡ります。神が初めて沈黙を破るのです。神の答えは次のように要約できます。人間は有限な存在であり、理解できないことが沢山ある。義人であるヨブが何故このような不条理を体験しなければならないのかという問いはその一つだ。それはいかなる論理も、いかなる深遠な思想も、それが人間から出たものである限り真の答えではない。

しかし神の答えはここで終わるわけではありません。ここで神は一つの驚くべき真実をヨブに提示されます。ヨブは苦しみの中でひとりぼっちではないというのです。ヨブは神に祈ることができるというのです。神よ、私にこの苦しみと闘うために必要な勇気を、力を、と祈ることができるというのです。神はその祈りに必ず答え給うというのです。

神はヨブの存在を心にかけて下さっているのでしょうか。勿論です。ヨブの苦しみをご存知なのではないか。その通りです。ヨブを愛しておられるのでしょうか。然り、然りです。

竜巻の中から響く神の声を耳にしてヨブは跪き、神を仰いで言います。「私はこれまであなたのことを耳で聞いていました。これからは心の目であなたを拝見いたします。」

何故このような不条理が私に、という問いへの答えは与えられませんでした。しかし、もっと重要な問い、即ちこの不条理とどう取り組んだらいいのかという問いに神は十分答えておられます。

主イエスはこのヨブのメッセージを深め、より身近なものにし、より明確にされました。主イエスにおいて、神は最早不条理に苦しんでいる私たちに竜巻の中から「がんばれ、がんばれ」と応援の声をおかけになるわけではありません。主イエスにおいて神は私たちの只中に降り給うたのです。

自分が力の限り愛した弟子達から裏切られ、見捨てられ、政治犯として官憲に逮捕され、唾され、十字架にかけられるという不条理をその身に負われたのです。主イエスにおいて神ご自身が私たち以上に深く不条理を体験されたのです。

ですから私たちは主イエスに支えられて不条理と正々堂々と取り組めるのです。ヨブは神の愛を竜巻の中から響き渡る声として体験しました。私たちはヨブより恵まれています。何故なら、私たちは主イエスを通して神の愛を体験できるからです。

私たちには何故苦しまなければならないのかという理由を知ることは許されていません。「ああ、そうか。成る程。それなら分かった」というような、すべての人が納得できる簡単明瞭な答えは与えられていません。それは人類の歴史が続く限り神秘の領域に置かれ続けるでしょう。

しかし確かなことが一つあります。それは主イエスは私たちの只中にいまし、私たちの重荷を背負って下さるということです。私たちはひとりぼっちで不条理と取り組むのではないのです。イエスが私たちと共に、私たちのために闘っておられるのです。ですからパウロはコリントの信徒への手紙の中で記しています。「神は耐えられない試練を私たちにお与えになりません。」

受難節を生きる私達です。是非このパウロの信仰を自らのものとしようではありませんか。この信仰を私たちの生きる上での指針としようではありませんか。主イエスを仰ぎ見ながら、一日一日を、深く、生き生きと生きようではありませんか。